

## 主 題：御霊の賜物②

## 聖書箇所：コリント人への手紙第一 12章8-20節

私はあなた方に無知であってほしくないとパウロは言いました。「御霊の賜物」について、つまり霊的賜物について正しく知ってもらいたいと。それがパウロが願ったことであり、そのメッセージがここに記されています。なぜ霊的賜物を正しく理解し、それを正しく用いることが大切かということ、そのことによってあなた自身の聖さが増していくからです。あなた自身の信仰が成長し、同時に群れ全体が聖められ、群れ全体が成長するからです。ですからこの霊的賜物、「御霊の賜物」について正しく知ること、そして正しくそれをあなた自身が用いることがとても大切なのです。

この霊的賜物というのは、あなたが救いにあずかった時に、神様から与えられたギフトであるということを見てきました。持って生まれた才能ではありません。確かにそういった才能をお用いになって、神の栄光を現してくださることはあります。でも今私たちが学んでいる「御霊の賜物」、霊的賜物というのは、あなたが救いにあずかった時に、神がギフトとしてあなたに与えてくださったものです。ということは、神様はあなたに対して計画を持っておられるということです。神様はあなたをお用いになるということです。既に見たように、霊的賜物にはいろいろな種類がありました。奉仕にも働きにもいろいろな種類がある。しかし三位一体の神がそれらを与えた以上、そこには完全なご計画があるのです。それはその群れ全体が分裂するのではなくて、逆に一つになって霊的成長を果たすことです。

きょうもこの「御霊の賜物」、霊的賜物について話していきます。12章に入って、聖霊なる神様の働きについて学び始めました。

## A. 救いをもたらす 2-3節

聖霊なる神がまず救いをもたらすことを学んできました。聖霊なる神の働きによって私たちはこの救いにあずかったと。

## B. 霊的賜物を与える 4-11節

同時に聖霊なる神様は今見てきたように、信じたひとりひとりに霊的賜物を与えてくださる。

## 1. 賜物の目的 4-7節

7節まで私たちはなぜその賜物が与えられるのか、その賜物の目的を見てきました。

## 2. 賜物の種類 8-11節

そしてきょう私たちが見ていこうとする8-11節までは、与えられる賜物の種類が記されています。どんな賜物を主が与えてくださるのかについてご一緒に見ていきます。

Iコリント12：8-10まで賜物の9つの項目が挙がっています。この賜物のリストについてはここだけではなくて、12：28、ローマ12：6-8、エペソ4：11-12にも出てきます。今挙げたところには19の異なる賜物と、例えば十二使徒などのさまざまな任務が記されています。ローマ書に書かれているリストとコリントに書かれているリストは異なります。なぜこういうことになっているかということ、神様がお与えになる賜物はこれだけではないからです。そしてここに記されているいろいろな賜物の中にも、いろいろな種類があるということです。例えば我々はこの後知恵というのを見るのですが、知恵の中にもいろいろな種類の知恵があるということです。そういうことを頭に入れながら、パウロが挙げてくれたこの8-10節にある9つの賜物について見ていきたいと思えます。

まず8節を見ると「ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、」と書かれています。まず最初にパウロが言うのは、この霊的な賜物というのは御霊によって与えられるということです。つまり御霊、聖霊なる神様を通して我々キリスト者に与えられたものだということです。この与えられるという動詞も受け身で書かれています。あなたが一生懸命こういう賜物が欲しいと願って手に入れるのではなくて、神が一方的に働いてそれをあなたにお与えになるのだということを教えています。今お話ししていることがこの後も繰り返し繰り返しパウロによって教えられています。種類を見ていきましょう。

## 1) 「知恵のことば」 8節 エペソ5：10

まず「知恵のことば」という最初の賜物が8節に記されています。「ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、」と。この「知恵」ということばは、聖書の教える神様の真理、神様のみこころを理解し、それを理解するだけではなく、実際の生活で適応する人のことです。実はそれは大変難しいですよ。なぜならすべてのクリスチャンがそれを実践しようとするのです。みことばを聞くだけではない、そこで教えられた真理を私たちが日々いろいろなことを経験する中で、そのみことばを適応していくのです。それがみことばによって生きるということです。ですからこの「知恵」ある人というのは、その

神様の真理を、神のみこころを理解するだけではないのです。日々起こるさまざまな状況に対して、どういう選択が神の前に喜ばれ、どういう選択が神の栄光を現すのかを見極めてそれを選択することができる人です。エペソ5：10には「そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。」と書かれています。大変な悲しみの中であってどういう選択が神の前に喜ばれるのか、何かに怒りを覚えた時にどういう選択が神の前に喜ばれることなのか、そういうことがちゃんとわかってそういう選択をする人の話です。

ここには「知恵のことば」とありますから、この人は自分がわかってそのように行動するだけではない。それを人々にも教えることができるということです。どういう選択が正しいのか、例えば聖書に基づいたカウンセリングをするカウンセラーの人たちはいろいろなことに対して聖書的に見てどこに問題があり、どういう選択が正しいのかを教えています。そういう賜物が与えられている人たちがいることを我々は知っています。

## 2) 「知識のことば」 8節 ローマ1：3、4・8：4

「ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことばが与えられ、」と、二つ目は「知識のことば」です。この「知識」というのは、みことばの真理を理解し、解釈する賜物です。つまり聖書を読んでいて、そこに書かれている真理を正しく理解することのできる賜物のことです。もちろん信仰者である私たちは、聖霊なる神様をいただいており、その聖霊なる神が我々の教師であるゆえに、みことばの真理をある程度くみ取ることができます。イエス様を信じる前全くできなかったことが、私たちが信じてからその神の真理を知ることができるのですが、ここで言われている「知識」というのはそのレベルではないということです。聖書を学んでその真理をしっかりとくみ取る特別な能力のことです。例えば註解書を書くような特別な人たちです。新約聖書であるならば、ギリシャ語に大変通じていて、こういう意味があるのかと我々では気づかないようなことをその人は気づいて、文法においてとか、すべてにおいてこのテキストが言わんとするのはこういう意味だろうとくみ取ることのできる特別な賜物がここに記されているのです。

一つ見ておいていただきたいのは、「同じ御霊にかなう知識のことば」と書いてあります。これは聖霊なる神様と同意しているということです。なぜこんなことばが書いてあるかということ、いろいろな人がこれは神様のことばだと言うのですが、問題はそれが本当に神のことばなのか、メッセージなのかどうかです。私的解釈を施して自分の好きなようにそのみことばを活用している場合もあるのです。そういう話ではないのです。ですからここで言われたように、御霊に同意している、聖霊なる神様と同意している、つまりここに記されている神の真理をしっかりと理解することもできるという賜物の話です。

## 3) 「信仰」 9節 IIコリント1：8-10

三つ目には9節で「またある人には同じ御霊による信仰が与えられ、」と「信仰」というのが出ています。この「信仰」というのは、イエス様を信じますという信仰でないことはおわかりだと思います。また日々の生活においてクリスチャンが主を信頼して生きる、そういう信仰でもありません。この「信仰」というのは、人間的に見て手に負えない障害であったり、不可能と思える問題に直面した時にも揺るがず、主を信頼し続けるという「信仰」の話です。

例を挙げます。間違いなくこの「信仰」という賜物を持っていたのはパウロです。パウロは大変な困難に直面した時に、神への信頼が弱まったかということ、逆に強まるような人物でした。IIコリント1：8-10を見れば、彼自身がアジャで遭った大変な苦しみの話が出ています。「非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。」、もう自分は死ぬのではないかと、そのようなことに直面したと。そのような中であってパウロは「もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。」と。例え自分がいろいろな迫害に遭遇しようと、死に直面しようと彼は主への信頼を失わなかった。この方はどんなことでもお出来になるのだという確信を持って彼は歩んでいた。そういう信仰者というのは、感謝なことに神様がたくさん置いてくださっています。ジョージ・ミューラーは孤児院を経営しており、孤児たちに提供する食べ物が全くなかったその朝、テーブルにお皿を並べて神に感謝をするのです。「この後与えてくださる食べ物を感謝します」と。そうするとすぐに神は食べ物を備えてくださった。不可能と思えることがあったとしても神に対する信仰は弱らない。かえってその信仰は強められていく。そういう信仰者がいました。まさにIコリント13：2が言うように「山を動かすほどの完全な信仰」、何があってもぶれない、何があっても信頼し続けるという信仰です。

私たちはそういう信仰者の姿を見るなら、その生きざまを見る時に少なくとも励ましを受けます。こんなふう生きていくことができるし、その信頼に値する神が私たちの神なのだ。彼らと同じように

信頼を置いて生きていくことができるのだと。ここに書かれてある「信仰」というのはそういう賜物のことです。

#### 4) 「いやし」 9節 使徒4：9、14、22、5：16

四つ目に出て来るのは「いやし」です。9節「ある人には同一の御霊によって、いやしの賜物が与えられ、」とあります。この「いやし」というのは病気をいやす賜物のことです。「いやし」という名詞が複数形で書かれてあるのは、病気にいろいろな種類が存在し、そのさまざまな病気がいやされたからです。使徒の働き4：9や14、22、5：16など、初代教会を見た時に確かに神様はさまざまないやしのみわざをなさったことが聖書の中には記されています。

#### 5) 「奇蹟を行う力」 10節

5番目は10節に「ある人には奇蹟を行なう力」とあります。この「奇蹟」というのは力の賜物です。この「奇蹟を行なう力」というのは、その働きや活動という意味があります。また、このことばは奇蹟的な方法で働かれる神様の力に用いられます。初代教会では神様は特別なみわざをなさいました。使徒2：43に「多くの不思議なわざとあかしの奇蹟が行なわれた。」と記されています。使徒8：13の中にも「すばらしい奇蹟が行なわれ」た、ガラテヤ3：5にも「奇蹟を行なわれた」とあります。確かに神様の御力が公に示された出来事、奇蹟がなされた出来事は聖書の中にたくさん記されています。今お話しした初代教会もそうだし、イエス様ご自身もたくさんの奇蹟を行われたのです。

具体的な奇蹟は大きく分けて二つありました。

##### ・悪霊を追い出す力 使徒19：11

一つは悪霊を追い出す力です。イエス様だけではなく、使徒たちもこういう奇蹟を行いました。使徒19：11に「神はパウロの手によって驚くべき奇蹟を行なわれた。」と出てきます。彼らは悪霊に憑かれた者たちから悪霊を追い出していたのです。

##### ・病気をいやす力 使徒19：12

同時に、病気をいやすという奇蹟のみわざもなされています。なぜ病気をいやす力が奇蹟なのかというと、病気がサタンや悪霊によってもたらされていることが多かったからです。ですから神は悪霊を追い出してその病気をいやされた。例えば使徒19：12に「パウロの身に着けている手ぬぐいや前掛けをはずして病人に当てると、その病気は去り、悪霊は出て行った。」と書いてあります。今お話ししたように、病気と悪霊の働きというのは非常に関連していました。そして、神は悪霊を押し出し、病気を治すという奇蹟のみわざを通して神様の御力を明らかにされたのです。

こういう賜物をいただいた人たちがいたとパウロは言います。

#### 6) 「預言」 10節 使徒11：28、21：11

六つ目は「預言」です。10節に「ある人には預言」と出ています。預言というと、将来に起こることを話すというふうに考えます。預言者というと、これからどういうことが起こるのか、まだ私たちが見えていないことを告げるような人。確かにそういう人々は存在しました。使徒11：28にはアガボという人のことが出ています。「世界中に大ききんが起ると」預言してそのとおりになったと記しています。また使徒21：11にも彼がパウロの帯を取って、この人がエルサレムに行ったらこんなふうにしばられると預言したことも書かれています。

しかし、ここで使われている「預言」を辞書は「キリスト教の教師たちの教えを説く力とことば」と定義します。ですから未来のことを告げるというよりも、神様の大切な教えを説いていく力とそのことばであると。神様の啓示、神のみことばを人々に語る賜物だと言います。特に誕生したばかりの教会は聖書を持っていなかったの、この人たちは特別な状況において何をすべきなのか、また何を知るべきか、そういう神の真理を人々に告げたのです。バークレーは預言者についてこう言っています。「預言者とは神に近く生きていたゆえに、神の思い、心、意思、意図を知っており、従ってこれを人々に語り得る人を言う」と。神様の思いや神の心、神の意思、神の意図を人々に伝える者たちであると。ですから私たちが考える未来のことをただ告げる預言者とは違います。

#### 7) 「霊を見分ける力」 10節 Iヨハネ4：1、使徒19：13、IIコリント11：14

7つ目は10節に「霊を見分ける力」と同じように出てきます。この人は語られている教えが神からのものなのかどうか、それが真実なのか虚偽なのかを見分けることができる。サタンから来たものか、神から来たものなのか、それを見分ける力です。Iヨハネ4：1でヨハネはこんなことを教えています。「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。」と。この「ためしなさい」とあるのは「吟味しなさい」、「テストしなさい」ということです。にせ預言者がいっぱい出てきたから、語られているメッセージが本当に神の真理なのかどうかをテストしなさいと。この当てもこういう賜物をいただいた人たちがいて、そういう人たちは大変重要な働きをしました。

今も同じで、いろいろな教えがなされています。異端を語る人がやってきた時に、「これから聖書の教えでない教えを伝えます」などと言ったら誰も聞きません。彼らは聖書を教えましょう、聖書を一緒に勉強しませんか？と言うのです。でも実は非常に巧みに聖書ではなくて神らの教えを伝えるのです。かなり前、多分高校生だったと思いますが、私は梅田の駅前である人に止められてこれから聖書の勉強会があるから行きませんかと誘われて中之島の公会堂へ行きました。その団体が何をしたかという、スクリーンに聖書のみことばを記して、皆さんは多分このみことばをこういうふう解釈したはずでしょう？こういうふう教えられたはずでしょう？でも実はこういう意味なのだと。それを聞いた瞬間にこの人たちはうそを言っていると、この教えは間違っているとすぐに退席したのを覚えています、統一教会でした。これが真理だと言って大変巧妙に人々を惑わすのです。サタンは喜んでそういう働きをします。ですから、どの時代にあってもこれが本当に真理かどうかを見極めることが必要です。私たちの教会にあって信仰の基礎を学ぶのは、我々は何を信じているのか、なぜ信じているのかをしっかりと自分の身に着けるためです。それがいろいろな間違った教えに対して自分を守ることになるからです。

## 8) 「異言」 10節

8番目には「ある人には異言」とあります。新改訳聖書の第二版には「異言」と書かれていますが、新改訳2017を見ると、「ある人には種々の異言」と書かれています。どちらかというところらの訳の方が正しいのです。というのはこの「異言」は複数で書かれています。しかも原語にはさまざま種類ということばもつけられています。この「異言」ということばは舌や言語という意味があります。この当てもそうでしたけれども、恍惚状態に陥った者が礼拝の中で意味不明のことを話すことがあったのです。誰かが礼拝の中で立ち上がって、訳の分からないことを話し始めると、それを見ていた人々はこれは主からの働きであると信じて、この「異言」という賜物を切望したのです。しかし、「異言」は、実際に人々によって話されていた言語だったのです。訳の分からない恍惚状態で話す意味の分からないものでは決してなかったということ。そのことは14章に入るとパウロがより詳しく教えてくれています。その時にもう少し見たいと思います。

## 9) 「異言を解き明かす力」 10節

最後は「異言を解き明かす力」と書いてあります。「ある人には異言を解き明かす力が与えられています。」、なぜこれが必要かという、この「解き明かす力」というのは通訳とか説明、翻訳という意味を持ったことばです。パウロはこの「異言」という賜物の危険性を知っていたゆえに、それを解き明かす人の必要性を教えるのです。なぜなら誰かが今この場に立って、例えばカンボジア語で話し始めたとしたら、恐らく座っている我々はみんな何を言っているかわからない。当然そこには通訳者が必要です。その時に初めてその意味を理解することができる。パウロはいろいろな外国語で話した時に、それを通訳する人が必要なのだと言っているのです。

### 結論：

こういう9つの賜物が存在するとパウロは記しました。最初にもお話ししたように、9つの中にいろいろな種類が含まれています。例えば「知識」の賜物の中でもいろいろな「知識」の賜物があるということです。11節にまとめて結論が記されています。「しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。」と。確かにさまざまな賜物があるけれども、すべては主のみわざなのだということ。驚くべきことにこの中で何度も何度もパウロはこのことを繰り返しています。ただパウロはこう言いたいのです。ここにあるように「みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださる」、「みこころのままに」というのは誰かの助言をもらってとか、誰かのアドバイスを通してではなくて、神様が意図されるように、神ご自身がこういうふうにしてしようと希望されるとおりにということです。だからあなたに与えられている賜物は、神がご自分の意思をもってあなたに与えてくださったものだ。ですからそれを与えてくださった神のために用いるのは当たり前話です、そのために神様は与えてくださったのですから。

ここに「おのおのにそれぞれの賜物」とあります。つまり賜物をいただけないキリスト者はいないということです。すべてのキリスト者に賜物が与えられていることを見てきました。例外はありません。救いにあずかったならば、あなたには賜物が与えられているのです。しかもこの分け与えるということばは現在形の動詞です。「分ける」というのも「与える」というのも両方とも現在形が使われています。今もこの働きは続いているからです。今も救いにあずかる人たちが起こされているのです。そういう人々に神はこの「賜物を分け与え」という働きを継続されている。しかもこれは受動態です。最初に見たように、これはあなたや私がどれを選びますかという選択の中で自分の好きなものを選ぶというのではなくて、神が一方的にご自分のご意思に基づいてあなたに与えてくださるのだと教えるのです。

**\*覚えておいていただきたいこと**

次に進む前に、この賜物についてぜひ皆さんに覚えておいていただきたいことがあります。それは今私たちが見てきた9つの賜物すべてが今も変わらず与えられているかということ、そうではないということです。現在でも与えられている賜物と与えられていない賜物が存在します。

では現在でも与えられている賜物は何かということ、これは兄弟姉妹の霊的成長のために与えられ続けている賜物です。この賜物のことを永続的また建德的賜物というふうに呼びます。ではこの9つの中でどれが該当するかということ、知恵・知識・預言（教えを説くこと）・信仰・霊を見分ける賜物です。

では与えられていない賜物とはということ、これらは使徒たちの時代に限定された賜物です。ですからこれを一時的なしるしの賜物と呼びます。どんな賜物がそれに該当するかということ、奇蹟・いやし・異言と異言の解き明かしです。なぜこれが今必要ないのかということ、初代教会の時にまだ聖書は完成していませんでした。ですから使徒たち自身も自分たちの語るメッセージが神からのものであることを確認するために、またそのメッセージを聞いている人たちもこれは確かに神が語っておられるのだということを確認するために、さまざまな奇蹟が主によって用いられたのです。ですからメッセージとともにそういった奇蹟が伴ったのです。そしてそれを語っている者も聞いている者たちもこれは神のメッセージだと。でも今はもう必要なくなったのです。なぜかということ、神の啓示はすべて聖書に記されているからです。ですから聖書の完成とともにそういったものは必要でなくなったのです。

教会の中には今もこういった賜物、例えばいやしの賜物が今も継続していると教えているところがあります。だとしたら、今いのちの危険を覚えている人たちは山ほどいます。世界中にどれだけ病気の人がいるのかと。災害でいのちを落としたような人たち、そういうところに行ってそういう人たちに新しいいのちを与えるべきです。初代教会では確かに死人をいやしたり、死からよみがえらせることもありました。でもそういったことは私たちの周りを見ることはできない。またそういう賜物をいただいている人がそういうところへ行って、そういう人たちをいやそうともしない。なぜかということできないからです。ですから私たちはこういったことに対しても聖書が何と教えているのか、大変注意深く観察をしなければいけない。私たちはそこに立たなければいけないのです。

## C. キリストのからだの一員とする 12-20節

### 1. 一つのからだの多くの器官 12 a 節

聖霊の働きとして、救いを与えること、霊的賜物を与えることを見てきました。12節から3つ目のことが書かれています。それはキリストのからだの一員とするという働きです。12節「ですから、ちょうど、からだ一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。」、パウロはまず私たちのからだを見てごらん下さい、からだはみんな一つだと言うのです。しかしそのからだの中にいろいろな部分がある。いろいろな器官、臓器がその中にあります。レントゲンを撮ってみたら、からだの中に心臓しかなかったなんてことはあり得ない。すべての臓器が存在し、そういうものが実は一つのからだの中に存在しているのです。それがこの後パウロが続けて教えようとするのです。からだの中にいっぱい臓器や器官があるけれども、一つのからだだと言うのです。そのことを繰り返します。「ですから、ちょうど、からだ一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだ」だと。言っていることはわかりますよね？我々も自分のからだを見たらいいのです。

### 2. キリストのからだと多くの器官 12 b-13節

パウロは誰もがわかるようなことを使って、次の真理を伝えたいのです。それは「キリストもそれと同様です」ということです。人間のからだからキリストのからだへと話を移していくのです。12節の最後のところから13節にそのことが記されています。13節「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」と。パウロはこうして一つのからだに多くの器官がある、臓器がある人間と、キリストのからだもまさに同じであって、そこにたくさんの救いにあずかった人たちがいると、人間のからだとキリストのからだの類似点を教えようとするのです。

今からこのキリストのからだの説明をします。パウロはキリストのからだと言いました。このからだは救いにあずかった真のクリスチャンだけが属しているからだです。「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も」と書いてあります。つまりこのキリストのからだの中には、人種も社会的地位も教育も一切関係ないと。すべてが神の子どもであり、そこに属するすべての人は神の家族なのだと言うのです。ですからキリストのからだと言った時にその体に属している人、人間のからだにいろいろな器官があるように、いろいろな部分があるように、キリストのからだにもいろいろな器官がある、いろいろな部分がある。その部分というのは救いにあずかった真のクリスチャンたちだと言うのです。

・キリストのからだに「バプテスマ」によって属する

ではこのからだにどうやって属することができるかという、13節は、聖霊のバプテスマによってのみこのからだに属することができるかと教えます。「一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け」と書いてあります。この「一つの御霊」というのは聖霊なる神の話です。聖霊なる神によってバプテスマを受ける、つまり聖霊のバプテスマがその人をキリストのからだの一部にするのだと言うのです。

ですから、「一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け」る、このバプテスマによって「一つのからだとなる」のです。そしてこの「一つのからだ」というのが先ほどから見ているようにキリストのからだなのです。だからもしあなたがこのキリストのからだに属したいと思うのなら、バプテスマ、つまり救いが必要だと言っているのです。でも、このバプテスマは水のバプテスマを指しているわけではありません。我々既に見てきましたが、水のバプテスマというのは、救われたのですよということを公に証する儀式に過ぎない。イエス様を信じる信仰によってのみ私たちはこの救いにあずかるのです。そしてイエス様を信じて救いにあずかった時に、水ではなくて聖霊のバプテスマをいただくのです。そして救われた者だけがこのキリストのからだに属するのです。

また同時に、パウロはこの救いのことを13節で「そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」と説明するのです。つまり彼は水を飲むことで渇きが満たされるように、心の渇きは「一つの御霊を飲む」、聖霊を飲むことによって満たされると言っているのです。というのはイエス様がそうお教えになったからです。祭りの終わりの大いなる日にイエス様は大声でこんなことを言われます。

「『だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。』これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである。」、ヨハネ7：37-39です。救いにあずかることを「御霊を飲む」のだとパウロは表現したのです。御霊をいただくことです。

ですから、キリストの「一つのからだ」が存在し、ちょうど人間のからだ一つであるように、そして人間のからだはいろいろな器官によって成り立っているように、キリストのからだもいろいろな器官によって成り立っている、そしてあなたがその器官なのだと教えるのです。そしてあなたがそのキリストのからだに属するためには御霊のバプテスマ、聖霊のバプテスマが必要だ、「御霊を飲む」ことが必要だとパウロは言うのです。ですから聖霊のバプテスマを受けておられなければ、あなたはキリストのからだに属していないということです。そして聖霊のバプテスマというのは、聖霊に満たされることではありません。私たち信仰者が聖書の中で御霊に満たされなさいと教えられていますが、それは私たちクリスチャンが歩いていくために聖霊に支配されるということで、聖霊のバプテスマの話ではありません。聖霊のバプテスマというのは、聖霊が自分の住処として、自分の家としてその人のうちに内住してくださるということです。クリスチャンの心のうちには聖霊なる神が宿ってくださると。

**\* 正確に言えば、この働きは「キリスト」によってなされる マタイ3：11-12**

さて、次の話に移る前に、一つだけ覚えておいていただきたいのは、正確に言えば、この聖霊のバプテスマはキリストによってなされるみわざです。「御霊によってバプテスマを受け」と13節に書かれています。聖霊によってバプテスマを受けると。この「よって」と訳されている前置詞は「とともに」というふうにも訳されることばです。聖霊によって、また聖霊とともにと言えます。つまりイエス様が聖霊をお使いになってこのみわざをなしたということです。ですから実際に聖霊のバプテスマをお与えになるのはイエス様ご自身です。どうしてそう言えるかという、イエス様がバプテスマをお受けになる時の様子を思い出してください。バプテスマのヨハネがヨハネ3：11で私は「水のバプテスマを授けていますが、私のあとから来られる方は、私よりもさらに力のある方です。……その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。」と、後に来られるイエス様の話をしています。つまりイエス様は「聖霊と火とのバプテスマをお授けに」と記されています。イエス様が二つのことをなすのです。一つは聖霊のバプテスマを授け、もう一つは火のバプテスマを授けるということです。何の話をしているのかというと、聖霊のバプテスマというのは救いの話です。火のバプテスマは永遠のさばきの話です。人を救うことも、そしてその救いを拒んだ者たちに永遠のさばきを下すことも主ご自身に与えられた権利なのです。私たちはイエス様を信じるこの信仰によって、神の恵みによってキリストのからだの部分とされたのです。

### **3. 各器官の重要さ 14-16節**

さて、パウロは14節からそのからだを構成している各器官、それぞれの重要さについて教えていきます。「確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。」、難しい話ではありません。心臓一つがあるわけではない。肺だけではない。からだにはいろいろな器官が存在していると。ですから15-16節「たとい、足が、『私は手ではないから、からだに属さない。』と言ったところで、そ

んなことだからに属さなくなるわけではありません。たとい、耳が、『私は目ではないから、からだに属さない。』と言ったところで、そんなことだからに属さなくなるわけではありません。」と。もう説明する必要もありませんよね。例えば足が私は手でないからからだに属さないと言ったからといって、からだから離れていくことができるのかと。そんなことはあり得ません。耳が私は目でないから、嫌だ、私はこんなからだに属したくないとたとえ言ったとしても、だからと言ってからだから離れていくことなどあり得ない話です。

つまりからだを見た時に、手も耳も目も足もすべての器官が必要だということです。同じようにキリストのからだでもそれが言えると言うのです。注意して聞いてください。イエス様が言っていることは、あなたのからだの中でこんな要らないという器官がないように、キリストのからだに属するひとりひとりのクリスチャンも、こんなクリスチャンは必要ではない、こんな人は必要ない、そんなクリスチャンはひとりもないということです。確かにいろいろな賜物があります。でも神はあなたに対してあなたなんか必要としないと言っておられないということです。大切な存在だということです。なぜなら大切な役割があなたに与えられているからです。

#### 4. 各器官の役割：それぞれには大切な役割がある 17-20節

パウロは17節からそのことを教えていきます。「もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が聞くところであったら、どこでかぐのでしょうか。」と。からだが目しかなかったら、どうやって音を聞けるか。からだ全体が耳だったらどうやってにおいのかぐことができるかと。つまり目には目の働き、耳には耳の働き、鼻には鼻の働きがある。それぞれがからだとして重要だということです。その器官にしかできない役割があるのです。耳は聞くためのもの、目は見るためのもので、その役割が与えられているのです。

なぜかという、18節「しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。」、つまりあなたを耳にしたのは神だと言うのです。あなたを目にしたのは神だと。それはすべて神様のなさるみわざだと言うのです。「神はみこころに従って」、先ほど見たように神様ご自身の思いに従って、神がそのようにしようと思われた、その思いに沿って神様はすべてのことをなされた。だからキリストのからだに属するあなたはどこかの器官なのです。あなたは手かもしれない、なぜかという神があなたを手としてそこに置かれたのです。あなたを足として置いてくれたのです。あなたを口として置いてくれたのです。当然あなたに要求されているのは、手としての働きをなささい、口としての働きをなささいということです。なぜならもし耳がいや、おれはもういいと、もう聞きたくない、働きをやめると言ったとしたら、そしてそれが実際できたとしたら、我々は大変不自由しません？手がもう働きいやだ、やめると言った時に我々は手を使わないで生活することは大変だと思いませんか？つまり我々のからだというのはすべてのパーツが必要なのです。そのパーツがそれぞれの役割を担うことによって、ちゃんと調和がとれているのです。パウロが言いたいことはすべての信仰者、キリストのからだに属しているあなたはどのパーツであったとしても重要だということです。

19-20節「もし、全部がただ一つの器官であったら、からだはいったいどこにあるのでしょうか。しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。」と。パウロは、神様の恵みによって救いにあずかった皆さん、キリストのからだの中に入れられた皆さん、聖霊のバプテスマによってこのすばらしいキリストの器官となった皆さん、つまりクリスチャンであるあなたに言っているのです。神があなたに奉仕することを望んでいるのです。その役割を担うことです。今私たちが見てきたことは、どのパートであったとしても、そのパートとしての役割がある、そのパートとしての働きが当然要求されているのです。耳は耳としての働きをなささい、目は目としての、手は手としての働き、足は足としての働き。つまりすべてが働き人なのです。そしてそのように神様がお定めになったのです。ですからあなたや私が働くことが主のみこころなのです。だとすれば、働かないことは神のみこころに逆らうことなのです。働くことが我々に与えられた役割なのです。ペテロはIペテロ4:11で「語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。」と言っています。どんな賜物であろうと、神が与えてくださる力によって、その働きをなささい、奉仕しなさいと。どんな賜物を持っていようと、「それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。」と。あなたがそのように奉仕することによって、あなたの役割をしっかりと担うことによって、「神があがめられる」からだ。こうやって生きなさいというのがみこころなのです。

信仰者の皆さん、教会は奉仕者が集まっているのです。この中の誰ひとりとして私は見学者ですとか、私は傍観者ですとか、そんな人はいないのです。みことばはそんなことを教えていないからです。あなたに与えられた賜物を使うことです。それを用いて一生懸命主に仕え、教会に仕えることです。そのことを通して神様のすばらしさが証しされていく。神が喜んでくださると。

ひとつだけ付け加えたとしたら、何をしたいのかわからないというのが現実かもしれない。そしてできることを一生懸命探しておられる。もし皆さんが主よ、私を使ってくださいという祈りをしてもらったら、神様は必ずあなたの中にいろいろな重荷を下さる。それを始めていくのです。今までに誰もしていなかったことなら、あなたが始めればよい、あなたが最初になればよい。みことばが教えるのは神があなたを選び、救いへと導き、キリストのからだの一部としてくださった。あなたを使おうとしておられる。だから我々信仰者ひとりひとりの祈りは、主よ、あなたの栄光のためにどうか私を使ってくださいと、その祈りをもってこの一日を、この一週間を歩み続けてください。必ず神様はあなたを使ってくださる。そしてあなたが用いられることによってあなた自身も喜ぶのです。信仰生活をそうやって歩んでいきたいです。